

英語科学生の英語検定試験の 受験状況に関する調査

鈴木 順和・大坪 勝郎

A Survey on the Taking of Public English Examinations by English Department Students

Toshikazu SUZUKI and Katsuro OTSUBO

Summary

This study was conducted to investigate the taking of many kinds of public English examinations by English department students. Subjects were 351 students, who were given a questionnaire consisting of 23 items. 242 students (68.9%) answered the questionnaire.

The results were as follows:

- 1) The ratio of students who had taken these examinations was higher among second-year students than among first-year students (respectively, 92%; 83%), but most in each year have taken some English examination.
- 2) The proportions of students who had taken the examinations were 94.8% for the Step Test (Jitsuyo Eigo Ginou Kenteishiken: Eiken), 30.5% for Shogyo Eigo (Business English Test for high school students), and there were little students who took the other tests. Almost all students have passed the 3rd grade in the Step Test, and about half the students have passed the 2nd grade in Shogyo Eigo.
- 3) The ratio of candidates for the examination in future was higher among first-year students than among second-year students (respectively, 97%; 83%), however almost all students wished to take some English examination.
- 4) The proportions of candidates who hope to take the examinations were 99.5% for the Step Test, 13.5% for TOEFL, 8.8% for TOEIC, and there were a little students who would take the other tests. The candidates for TOEFL were about 7 times as many as students who had already taken it. Almost all students hoped to pass the 2nd grade in the Step Test, and most of the students hoped to take 500-600 scores in TOEFL and 590-860 scores in TOEIC.

These results suggest that students have strong concern and motivation for these English examinations, especially for the Step Test. Judging from their relatively high concern and the target of high scores for TOEFL and TOEIC, the results also suggest that they have

begun to be interest in those tests because of a recent internationally oriented trend; however they have poor knowledge about those tests.

緒 言

英語科ではカリキュラム改革と英語科学生の教育・指導に役立てるためにさまざまな調査をすることになった。この研究はそうした調査の1つで、英語検定試験の受験状況についての調査研究である。英語検定試験といえば、通例「英検」と呼ばれる検定試験の名前が挙げられる。実用英語技能検定試験というのが正式名称であるが、これ以外にも総合的英語力を測定する検定試験はさまざまある。例えば、現在ではその名前がかなり知られるようになった TOEFL や TOEIC などがそれである。その他、国連英検、トリニティ・カレッジ試験、オックスフォード大学実用・実務英語検定試験、BETA、DATE、ケンブリッジ英検といった英語検定試験がある。また商業系の高校では、商業英語検定試験を受験させている。そこで最初に、ここで取り上げられた各種の英語検定試験の概要から説明していくことにする。

1) 英検（実用英語技能検定試験）

英検は文部省認定の制度で日本英語検定協会が昭和38年（1963年）より行っている英語検定試験である。多くの検定級は春秋の年2回行われ、年間の志願者数は275万人にも上るという（日本英語教育協会、1992）。最初は1・2・3級の3つの級別しかなかったが、昭和41年（1966年）に4級ができ、準1級と5級が昭和62年（1987年）に新たに加えられた。3級以上には一次試験（筆記とヒアリング）と二次試験（面接）があり、4級と5級は一次試験（筆記とヒアリング）のみである。筆記試験はマークシート方式（OMR方式）で、大部分が4つの選択肢から1つを選ぶという設問形式になっている。3級は80分、2級は90分、準1級は100分、1級は120分で、語彙力・読解力・文法を中心とした受験英語的な問題からなる。筆記試験は和文英訳・英文和訳的な問題を含んでおり、英語運用能力だけでなく日本語運用能力もテストされる形式になっている。ヒアリングテストは説明を含めて15－20分前後で、2部からなり対話および質問ないし英文を聞きその内容についての質問（10問）に答えるという設問形式である（4肢選択式）。2級と3級の面接（個人面接）は英文の「問題カード」が渡され、約1分間の黙読ののち、音読するように指示される。その後、そのカードの内容について質問（5問）され応答するという試験形式で、音読と質問の応答が採点対象となる。準1級の面接（個人面接）では「問題カード（4コマの絵）」が提示され、1分間の準備の後そのストーリーを2分間以内で英語で説明する設問と、問題に関する4つの質問に答えるという設問からなっている。1級にはリスニング・コンプリヘンション・テストが加えられており、英文が2度読まれそれに対する3つの質問に答えるという試験がなされる。面接は20人前後の受験者が1組になり、「題目カード」のテーマについて1分間の考慮後、約2分間の Speaking をし、さらにそれに関する面接委員の質問に英語で答えるという試験がなされる。

2) TOEFL (Test of English as a Foreign Language)

TOEFL は国際教育交換協議会が行っている、英語を母国語としない人を対象にした、米国・カナダの大学、大学院、専門学校などの高等教育機関に正規留学をするための英語検定試験である。現在、アメリカ・カナダの2300校の大学で、さらに最近ではオーストラリアやニュージーランドの

大学あるいは上智大学などの日本の大学においてさえ TOEFL が課されるようになっているという。International Test（年 6 回、土曜日実施）と Special Center Test（年 6 回、金曜日実施）の合計 12 回の試験が、毎月ほぼ 1 回の割合で行われており、受験者数は世界各国で合計 50 万人以上（1989 年調査）に上り、我が国では 1988 年度で約 7 万 8 千人が受験したという（大谷・大谷，1992）。これ以外にも Overseas Institutional Test（随時）と Institutional Test（アメリカ国内およびカナダのみで実施）の合計 4 種類のテストがある。日本で受験できるのは Institutional Test を除いた 3 種類で、Overseas Institutional Test は正規の試験と異なり、そのスコア・カードは公式のスコアとして認められていない。現在行われている TOEFL は 3 分野からなり、4 つの選択肢から 1 つを選ぶという設問形式で、3 つの分野でそれぞれに制限時間が設けてある（最初は 5 つの分野からなり、1976 年から現在の形式になる）。セクション I は聴解力テスト（Listening Comprehension）で 50 問（約 35 分）からなり、セクション II は文法的なテスト（Structure and Written Expression）で 40 問（25 分）からなり、セクション III は語彙力と読解力（Vocabulary and Reading Comprehension）で 60 問（45 分）からなっている。TOEFL の採点方法は偏差値方式で、テスト結果はほぼ 220－677 の範囲で設定される。毎回のテストの難易度の差は補正されるシステムになっており、その誤差はおおよそ ±14 ぐらいとされている。なお、1986 年から年 4 回 200－300 語の英文にまとめる 30 分間の作文テスト（Test of Written English : TWE）が加えられている。現在のところ、その成績は TOEFL の点数と無関係になっているが、今後は TOEFL の全ての試験日に TWE を導入することが検討されているという。因みに、アメリカの短期大学で最低 450 点、4 年制大学入学で最低 500 点、大学院入学では最低 550 点必要といわれる。しかしながら、現実的には大学レベルで 550 点、大学院レベルで 600 点取らないと入学が困難になっているらしい（大谷・大谷，1992；小川，1991）。ところで、600 点はアメリカ人学生とディスカッションできる英語能力といわれ、400 点以下では大学の授業についていけないとされている。つまり、400 点以下では意味がないとさえいわれている（山口，1986a, b）。

3) TOEIC (Test of English for International Communication)

TOEIC は国際ビジネスコミュニケーション協会が行っている、英語を母国語としていない人を対象にした、英語による国際コミュニケーション能力を測るテストである。TOEFL がアメリカの大学への入学資格検定を目的としたアカデミックな英語運用能力を測定するのに対して、TOEIC は主にビジネスマンを対象とした一般的で幅広い日常的英語運用能力を測定するための英語検定試験になっている。日本で考案され、ETS (Educational Testing Service) によって開発・制作された英語検定試験である。それ故、1979 年 12 月 2 日に日本で初めて実施されており、日本の経済界・実業界が積極的に応援しているテストといえる。毎年 1 月、5 月、9 月の 3 回実施される個人受験と、時期に関係なくいつでも受けられる団体受験 (Institutional Program : IP) の 2 種類がある。個人受験は札幌・仙台・東京・川崎・横浜・静岡・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・福岡の 12 都市だけであるが、団体受験は希望の日時・場所に応じて適宜実施されている。日本で第 1 回から第 20 回までにこのテストを受けた個人受験者は約 8 万人で、IP テストの受験者は既に 400 社を超え約 17 万人になるという（1986 年 5 月現在）。テスト問題は聴解問題 (Listening Comprehension : 100 題) と読解問題 (Reading Comprehension : 100 題) の 2 つからなり、聴解問題 (リスニングテスト) が 4 つのパートに分かれ、読解問題 (リーディングテスト) が 3 つのパートに分けられている。

リスニングテストは写真描写問題（20問）、応答問題（30問）、会話問題（30問）、説明文問題（20問）からなり、テスト時間は各パート合計45分である。リーディングテストは文法・語彙問題（40問）、誤文訂正問題（20問）、読解問題（40問）からなり、テスト時間は各パート合計75分である。テスト前の解説を除いて問題の指示、説明などはすべて英語で行われ、日常使われる会話のスピードを考慮して作られており、毎分150 words くらいの速度になっているという。テストの結果は0-990のスコアで示され、650点（TOEFL 522点）が企業が期待する英語力の水準とされている。なお、TOEICの得点をTOEFLの得点に換算する式が算出されており、 $[TOEIC \times 0.348 + 296 \div TOEFL]$ という関係になるとされる（山口、1986a）。

4) 商業検定

商業英語検定試験には全国各都道府県の商工会議所主催の商業英語検定と全国商業高等学校主催の英語検定（全商英検）があり、本学入学の学生が受験している商業英語検定は後者である。前者は等級が4クラスに分かれ、Aクラスは大学卒業後実務経験2年程度、Bクラスは大学卒業程度、Cクラスは大学在学者程度、Dクラスが高校在学者程度とされる。春秋の年2回行われ、A・Bクラスは350点満点で245点以上取ると合格とされ、C・Dクラスは200点満点で120点以上取ると合格とされている。Aクラスを除き二次試験はなく、英文解釈および英作文が主体のテストになっている。Aクラスにはそれ以外にヒアリングと貿易事務に関する問題が課され、二次試験として英語による口述試験が行われる。Bクラスにはディクテーションと貿易実務に関する問題が課される。後者は等級が3クラスに分かれ、1級・2級・3級の級別がなされている。

5) その他

その他について述べると、**国連英検**（国際連合公用語・英語検定試験）は日本国際連合協会が行っているテストで、国連公用語である6カ国語（アラビア語・中国語・英語・フランス語・ロシア語・スペイン語）の中で最も国際通用性の高い英語の普及と向上を図ることにより、国際的なコミュニケーションの促進を目指した検定試験である。特A級からD級までの5つの等級があり、春秋の年2回行われている。特A級は国際人として国際的な経済・政治・文化の場で活躍できる英語力とされ、A級は社会人、大学上級程度で、論文の理解・作成ができ、外国人と討論できる英語力、B級は英字新聞が読め理解できる程度、C級は中・高校程度、D級は中学程度とされる。B級以上は二次試験があり、一次試験は筆記試験で、二次試験が外国人との面接（1対1でフリートーキング）になっている。C・D級は一次試験のみで、筆記試験とヒアリング（テープテスト）が課される。合格ラインの公表はされていない。**トリニティ・カレッジ試験**（Trinity College Examinations）は1世紀にわたる歴史をもつ、英国大使館文化部（ブリティッシュ・カウンシル）公認の英語検定試験である。I-XIIのグレードがあり、どのグレードもイギリス人試験官とのマン・ツー・マン面接が基本となっている。グレードは大きく4つの等級に分かれ、グレードI-IIIは子ども向けで簡単な挨拶や質疑応答ができる程度、グレードIV-Vは質疑応答や自然な会話ができる程度、グレードVI-Xは日常会話ができ読んだ本を基に討論ができる英語力、グレードXI-XIIは会話や討論だけでなく、英文を書くことも自由にできる英語力とされる。一次試験のみで年1回行われ、正答率65%以上が合格とされる。なお、おとなはグレードVI以上を受けることとなっている。**オックスフォード大学検定試験**は実用・実務英語の運用能力を国際的な尺度で正当に評価するためのテストである。3つの等級があり、初級は高校1-2年程度で英語圏で平素使用されている表現が理解できる英語

力、中級はイギリスのカレッジに入学できる程度で英英辞典の活用にも習熟している、上級はアメリカの一流の大学やイギリスの大学に入学できる程度とされている。一次試験のみで年1回行われ、合格ラインの公表はなされていない。**BETA** (Businessmen's English Test and Appraisal) は日本のビジネスマンのために開発された英語力の総合判定をするテストである。1-10級まであり、1-4級は活用・応用できる英語能力、5-10級は基礎的英語能力の判定をするようになっている。聴解力・文法・語彙・読解力を判定する一次試験と一次試験に合格した者に対して Writing test と Spoken test の二次試験が課されている。随時試験は行われ、一次試験で535点以上取った者が二次試験を受けられる。**DATE** (Diagnostic Analysis Test of English) はビジネスマンの英語堪能度を測定し、長所・短所を診断分析するテストである。アメリカ国務省の付属機関 FSI (Foreign Service Institute) で開発した国際的評価基準に基づいて、0.0-5.0のポイントで6つの等級に分けられている。5.0は教養あるネイティブスピーカーと同等、4.0は担当業務及び一般分野での意思疎通が自由にできる、3.0は担当業務分野での意思疎通がほぼ自由にできる、2.0は担当業務分野での簡単な意思疎通がある程度できる、1.0はごく簡単な事項の伝達や理解はなんとかできる、0.0は英語でのコミュニケーションは不可能なレベルと判定される。一次試験のみで、Reading・Writing・Listening およびネイティブスピーカーとの面接が行われる。試験は随時行われ、合格ラインの公表はなされない。**ケンブリッジ英検** (University of Cambridge Local Examinations Syndicate Examinations in English as a Foreign Language) は英語を使って外国人とコミュニケーションできる能力を測定するテストである。4つの等級があり、特級 (CPE) は英国の大学入学許可の基準になるレベルで TOEFL 600 点以上に相当し、準1級 (FCE) は英語を日常使用する職場で働けるレベルで TOEFL 500 点以上に相当、2級 (PET) は初めて英語圏の国々で勉強または生活する人が日常生活をやりこなせるレベルで、3級 (Pre-PET) は高校2-3年の英語力に相当するレベルである。なお、3級の試験は日本だけで行われており、どの級も筆記試験 (読解・作文・英語運用等) とリスニング・インタビューが行われ、2級と3級は一次試験合格者に対してのみ二次試験 (オーラル・インタビュー) が課される。試験は年2回行われており、A-Eまでの評価のうちCまでが合格になる。

目 的

現在、日本では多くの高校生が「英検」と呼ばれる英語検定試験を受けている。しかし、上述したように英語検定試験の種類は多く、それ以外に TOEFL, TOEIC, 商業英語検定, 国連英検, トリニティ・カレッジ試験, オックスフォード大学検定試験, BETA, DATE, ケンブリッジ英検などさまざまな英語検定試験がある。こうした多様な英語検定試験のある中で、本学の英語科学生が現実によどのような検定試験を受け、将来によどのような検定試験を受ける希望を持っているのかについて調べるのが本研究の目的である。更に、現在の英語科学生の英語能力および英語能力向上の努力目標を検討するのもその目的の1つである。

Table 1
英語検定試験に関する調査結果の要約

質問項目	回答内容	1年生	2年生	総計	質問項目	回答内容	1年生	2年生	総計	質問項目	回答内容	1年生	2年生	総計
Q 1 (受験の有無)	はい	120	93	213	Q 4 (受験予定の有無)	はい	116	77	193	Q 8 (受験予定の有無)	はい	23	4	27
	いいえ	24	5	29		いいえ	4	16	20		いいえ	1	1	2
	無回答	0	3	3		無回答	0	0	0		無回答	0	0	0
	合 計	144	101	245		合 計	120	93	213		合 計	24	5	29
Q 2 (受験の種類)	英検	111	91	202	Q 5 (受験の種類)	英検	116	76	192	Q 9 (受験の種類)	英検	23	4	27
	TOEFL	4	0	4		TOEFL	19	7	26		TOEFL	3	0	3
	TOEIC	0	0	0		TOEIC	13	4	17		TOEIC	3	0	3
	商業英語	41	24	65		商業英語	4	3	7		商業英語	2	0	2
	その他	6	4	10		その他	5	1	6		その他	0	0	0
	無回答	0	0	0		無回答	0	0	0		無回答	0	0	0
	合 計	162	119	281		合 計	157	91	248		合 計	31	4	35
Q 3-1 (英検)	1 級	0	0	0	Q 6-1 (英検)	1 級	3	1	4	Q 10-1 (英検)	1 級	0	0	0
	準 1 級	0	0	0		準 1 級	6	13	19		準 1 級	1	0	1
	2 級	1	9	10		2 級	103	62	165		2 級	18	2	20
	3 級	100	64	164		3 級	2	0	2		3 級	4	2	6
	4 級	2	1	3		4 級	0	0	0		4 級	0	0	0
	5 級	0	0	0		5 級	0	0	0		5 級	0	0	0
	なし	8	13	21		なし	0	0	0		なし	0	0	0
	無回答	0	4	4		無回答	2	0	2		無回答	0	0	0
	合 計	111	91	202		合 計	116	76	192		合 計	23	4	27
Q 3-2 (TOEFL)	600-677	0	0	0	Q 6-2 (TOEFL)	600-677	1	0	1	Q 10-2 (TOEFL)	600-677	0	0	0
	550-600	0	0	0		550-600	8	1	9		550-600	1	0	1
	500-550	0	0	0		500-550	6	5	11		500-550	2	0	2
	460-500	0	0	0		460-500	1	0	1		460-500	0	0	0
	370-460	2	0	2		370-460	2	1	3		370-460	0	0	0
	370未満	0	0	0		370未満	0	0	0		370未満	0	0	0
	無回答	2	0	2		無回答	1	0	1		無回答	0	0	0
	合 計	4	0	4		合 計	19	7	26		合 計	3	0	3
Q 3-3 (TOEIC)	860-990	0	0	0	Q 6-3 (TOEIC)	860-990	0	1	1	Q 10-3 (TOEIC)	860-990	0	0	0
	730-860	0	0	0		730-860	4	0	4		730-860	0	0	0
	590-730	0	0	0		590-730	5	2	7		590-730	2	0	2
	470-590	0	0	0		470-590	3	1	4		470-590	0	0	0
	220-470	0	0	0		220-470	1	0	1		220-470	0	0	0
	220未満	0	0	0		220未満	0	0	0		220未満	0	0	0
	無回答	0	0	0		無回答	0	0	0		無回答	1	0	1
	合 計	0	0	0		合 計	13	4	17		合 計	3	0	3
Q 3-4 (商業英語)	1 級	10	4	14	Q 6-4 (商業英語)	1 級	2	1	3	Q 10-4 (商業英語)	1 級	0	0	0
	2 級	24	14	38		2 級	2	1	3		2 級	2	0	2
	3 級	7	5	12		3 級	0	0	0		3 級	0	0	0
	無回答	0	1	1		無回答	0	1	1		無回答	0	0	0
	合 計	41	24	65		合 計	4	3	7		合 計	2	0	2
Q 3-5(その他)		6	4	10	Q 6-5(その他)		5	1	6	Q 10-5(その他)		0	0	0
	Q 7 (受験しない理由)	無意味	0	0	Q 11 (受験しない理由)	無意味	0	0	0		無意味	0	0	0
		勉強不足	2	7		勉強不足	2	7	9		勉強不足	0	0	0
		時間がない	2	2		時間がない	2	2	4		時間がない	0	0	0
		自信がない	3	9		自信がない	3	9	12		自信がない	0	0	0
		興味がない	0	1		興味がない	0	1	1		興味がない	1	0	1
		理由なし	0	5		理由なし	0	5	5		理由なし	0	1	1
		その他	0	1		その他	0	1	1		その他	0	0	0
		合 計	7	25		合 計	7	25	32		合 計	1	1	2

方 法

調査対象者

本学英語科1年174名、2年177名の合計351名を対象に調査を行った。回収数は245名で、回収率は69.8%であった。その内3名の無回答票があり、実質回答数は242名で実質回答率は68.9%であった。

調査時期

1993年6月25日および7月10日に調査を行った。

調査方法

資料1にあるような全部で23項目からなる調査用紙を用いて、各学年毎にほぼ全員出席する時間にその場で調査用紙の配布・回収を行った。1年生は夏期オリエンテーションの時間に、2年生は簿記会計の時間に行った。なお、調査用紙は学年だけを明記する無記名記入の形式であった。

結 果 と 考 察

質問項目毎に分析していくことにする。なお、Table 1に全ての調査結果の実数の要約が示してある。

Q 1 今までに英語検定試験を受けたことがありますか。

全回答者245名の中で「はい」と答えた人が1年生で83.3%、2年生で92.1%、合計で86.9%とほとんどの学生が何らかの英語検定試験を受けていることを示した。特に、「いいえ」と答えた者が1年生では16.7%もいるのに対して、2年生ではわずか5%（5名）しかいず在学中に更に受験する傾向が強まることを示唆している。

Q 2 今までに受けた英語検定試験はどの種類ですか。受けた試験すべて答えてください（複数回答可）。

Fig. 1に示されているように、「英検」と答えた者が1年生で92.5%、2年生で97.8%、合計で94.8%と圧倒的に多い。しかも、その傾向は学年が上がるに従って強まっている。次に多いのが「商業英語」で、1年生で34.2%、2年生で25.8%、合計で30.5%と約3割の学生が受験している。本学に入学する学生の約4分の1が商業高校ないし

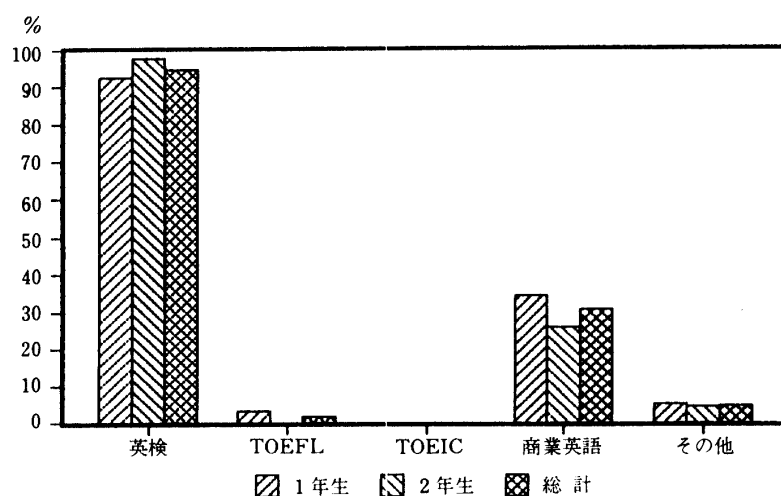


Fig. 1 受験した英語検定試験

商業系の学科卒業であり、この結果はそれが反映しているものと考えられる。最近よく知られるようになった TOEFL や TOEIC は、1 年生で TOEFL を受験した者が 3.3% いるだけで、2 年生は皆無であった。それ以外は、合計して国連英検を受験した者が 4 名と日本私立学校英語検定（日私英検）が 5 名いるぐらいである。

Q 3-1 英検に○印をつけた方は現在もっている級を教えてください。

Fig. 2 に示されているように、「3 級」と答えた者が 1 年生で 90.1%，2 年生で 70.3%，合計 81.2% とほとんどを占める。級を答えなかった者が次に多く、1 年生で 7.2%，2 年生で 18.7%，合計で 12.4% であった。「2 級」は 1 年生で 0.9%，2 年生で 9.9%，合計で 5% で 2 年生でやっと取得できるといった状態である（それも 9 名とわずかであるが）。「4 級」は 1 年生で 1.8%，2 年生で 1.1%，合計

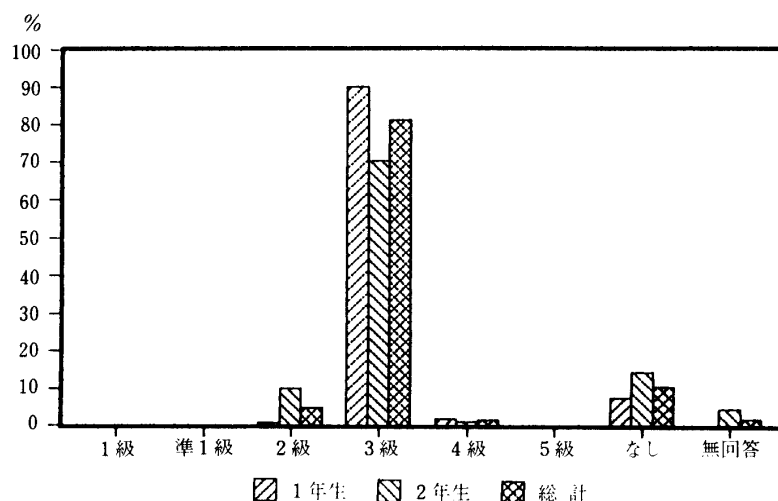


Fig. 2 現在持っている英語の資格 (級)

1.5% とほとんどいないことを示している。なお、1 級・準 1 級および 5 級はだれもいなかった。ところで、2 年生では回答しなかった者が 1 年生に比べて多く、2 年生でも 9 割近くが 3 級以下と思われる。

なお、大学受験の際に特技・資格として記載できるのは 2 级以上、という指導が日本英語検定協会の方からなされているという。換言すれば、3 級以下はその程度の英語能力であるとも考えられる。

Q 3-2 TOEFL に○印をつけた方は何点とったか教えてください。

1 年生に 4 名いるだけだが、その内 2 名だけが得点を答えており、共に 370 - 460 点の範囲である。いずれも高い得点とはいえない。

Q 3-3 TOEIC に○印をつけた方は何点とったか教えてください。

受験者なし。

Q 3-4 商業英語に○印をつけた方は現在もっている級を教えてください。

「2 級」と答えた者が 1 年生で 58.5%，2 年生で 58.3%，合計で 58.5% と過半数を占める。「1 級」と「3 級」と答えた者はそれぞれ同数くらいで、「1 級」が 1 年生で 24.4%，2 年生で 16.7%，合計で 21.5% で、「3 級」は 1 年生で 17.1%，2 年生で 20.8%，合計で 18.5% であった。全商英検のため短大に入学してから受験する者も少なく、1 年生も 2 年生もほぼ変わらない検定級を持っているものと考えられる。

Q 3-5 その他に○印をつけた方はその得点ないし級を書いてください。

国連英検は 3 名が結果待ちで、わずか 1 名が D 級に合格しているに過ぎなかった。日私英検は 5 名中 4 名 (80%) が 3 級で、2 級はわずか 1 名であった。それ以外、英語検定協会主催の検定 1 級と答えている者が 1 名いた。

Q 4 今後も英語検定試験を受ける予定ですか。

全回答者213名の内「はい」と答えた者が1年生で96.7%、2年生で82.8%、合計で90.6%とほとんどの学生が何らかの英語検定試験を受ける予定にしている。「いいえ」は2年生の17.2%に対して1年生でわずか3.3%であり、1年生の方が積極的に受験しようとする傾向がある。本学の学生は1年生から2年生の前期にかけて受験する傾向があり、2年生の後半になると多少受験を諦める学生が増えてくるようである。このことは、Q 1において2年生の受験率の方が高かったこととも符合している。

Q 5 「はい」と答えた方はどの検定試験を受けようと考えていますか。受験希望の試験をすべて教えてください（複数回答可）。

Fig. 3 に示されているように、Q 2 と同様に「英検」と答えた者が1年生で100%、2年生で98.7%、合計で99.5%と圧倒的であった。次に多かったのは「TOEFL」で、1年生で16.4%、2年生で9.1%、合計で13.5%であった。それ以外は、合計でTOEIC が8.8%、商業英語が3.6%、その他が3.1%であった。1年生でTOEIC 受験希望者が11.2%と多かったのを除けば、英検と TOEFL 以外はほとんど希望者がいない状態である。TOEFL も TOEIC も1年生の方が受験希望者が多かった。なお、Q 2 で商業英語の受験者が多かったが、これは高校向けの試験であるため、短大入学後も更に上の級を目指そうとする学生はほとんどいないことを示唆している。その他に含まれる試験は大部分が国連英検で、6名中5名（83.3%）が希望していた。

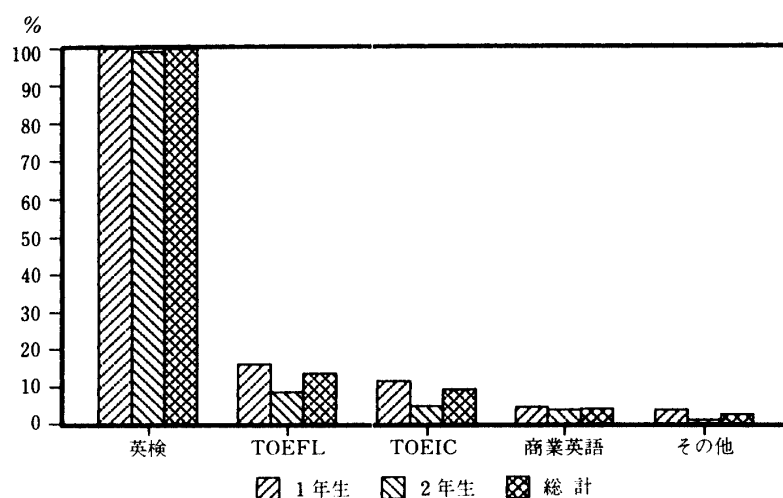


Fig. 3 受験予定の英語検定試験

Q 6-1 英検に○印をつけた方は希望する級を教えてください。

Fig. 4 に示されているように、「2級」の希望者が大半を占め、1年生で87.1%、2年生で80%、合計で84.5%であった。次は「準1級」が多く、1年生で5.0%、2年生で16.3%、合計で9.1%であった。合計で3級が3.7%、1級が1.8%いた。現在、3級を持っている者がほと

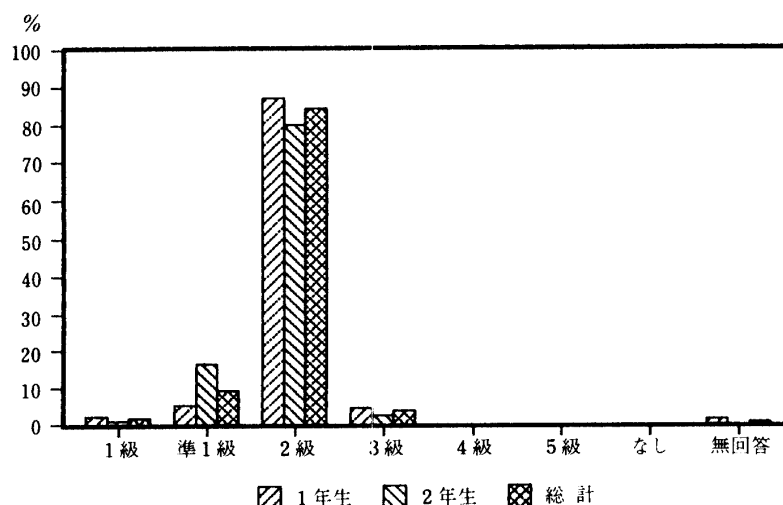


Fig. 4 受験希望している英検の資格（級）

んどであり、2級を目指す者が大半を占めるのは当然といえる。同時に、学生は長期的な展望に立って回答した可能性もあり、一概にそう決めつけられないかもしれないが、2級すら合格していない者が準1級を目指したり、1級をも望むのは自己の能力や努力を正当に評価していない面も回答から窺える。

Q 6-2 TOEFL に○印をつけた方は目標とする得点を答えてください。

「500-550」を目指している学生が最も多く、1年生で31.6%、2年生で71.4%、合計で42.3%であった。それに次いで「550-600」と回答した者が多く、1年生で42.1%、2年生で14.3%、合計で34.6%であった。この両者でほぼ4分の3を占めており、500点以上が多くの学生の目標といえる。それ以外、600点以上の回答者が1年生に1名、500点以下が合計4名いた。Q6-1に示されているように、1年生の方が2年生より受験希望者も多く、また高い得点を目標とする傾向があった。実際に受験した学生数はわずか4名で、しかもその得点は460点以下であり、目標得点と能力との間に大きな開きがあるといえる。受験希望はしても、その実態についてはほとんど知識のないことが窺える。

Q 6-3 TOEIC に○印をつけた方は目標とする得点を答えてください。

「590-730」を目指す学生が最も多く、1年生で38.5%、2年生で50%、合計で41.2%であった。「730-860」と「470-590」と回答した者の合計は同数で23.5%であるが、2年生には「730-860」と回答した者はいず、1年生では30.8%と次に多い目標得点であった。それ以外は、2年生で860点以上と回答した者が1名、470点以下と回答した者が1年生に1名いただけであった。ここでは目標得点に学年差が明確にでない。しかし、ここでもかなり高い得点を目標としており、現実感の乏しい目標設定になっていることが示唆されている。

Q 6-4 商業英語検定に○印をつけた方は希望する級を答えてください。

「1級」と「2級」を目標としている学生が同数で、1年生で50%ずつ、2年生で33.3%ずつで、合計でそれぞれ42.9%であった。実際の合格等級を考慮すると当然の結果となっている。

Q 6-5 その他に○印をつけた方は目標とする得点ないし級を書いてください。

国連英検の希望者5名中B級とC級がそれぞれ2名で、D級が1名であった。実際にはD級に1名合格しているだけであり、ここでも目標と現在の能力の間に大きな開きのあることが窺える。なお、残り1名の学生は500点という目標得点だけを答え、検定試験の種類は答えていなかった。

Q 7 「いいえ」と答えた方はその理由を挙げてください（複数回答可）。

「いいえ」と答えた学生は合計20名で、総回答数は32であった。その内「能力に自信がないから」と答えた者が60%、次に「勉強不足で合格が困難だから」と答えた者が45%であった。それ以外は、「特に理由なし」が25%、「時間がないから」が20%で、「興味がなくなったから」と「その他」が1名ずついた。「無意味だから」と答えた者は誰もいなかった。受験しない主な理由は、能力の低さや努力不足を感じているためと考えられる。

Q 8 Q 1で「いいえ」と答えた方で今後英語検定試験を受ける予定がありますか。

この質問の回答者数は合計29名であったが、その内「はい」と答えた者が1年生で95.8%、2年生で80%、合計で93.1%とほとんどを占めていた。「いいえ」と回答した者は、各学年1名ずつの合計2名であった。今まで検定試験を受けたことのない学生でも、ほとんどが受験希望していることを示している。

なお、Q 9 から Q10-5 までの質問は Q 5 から Q6-5 までの質問と同一で、全ての回答者が「英検」を希望していた。それ以外は 1 年生に TOEFL と TOEIC の希望者がそれぞれ 3 名、商業英語が 2 名いるだけで、2 年生は英検以外の受験希望をもっていなかった。しかも、「英検」については「2 級」の希望者が大部分で、74.1% を占める。次いで「3 級」の希望者が 22.2% である。TOEFL および TOEIC 共に「500-550」と「590-730」と同レベルの目標得点を持つ者が 66.7% と大半で、商業英語ではすべて「2 級」を目標としている。既受験者に比べると多少目標を低く設定している傾向が窺える。2 名の学生の受験しない理由としては、「興味がないから」と「特に理由なし」をそれぞれ挙げていた。今までに検定試験を受けたこともなく、今後も受けようとししない学生は学習意欲や物事に対する興味・関心の乏しいことが窺える。

全 体 的 考 察

本調査の範囲内で考察してみると、英語検定試験に対する受験意欲や関心の高さが窺える。特に、「英検」における受験率および受験希望の高さが際立っている。中学校時代から学校での積極的な指導もあり、英語検定試験の王様ともいえるべき地位を占めている。現在日本で実施されているさまざまな検定試験の中でも、歴史的に古くから行われていることもその一因と考えられる。ところで、近年話題となってきた TOEFL や TOEIC についてみると、両試験の受験希望者はそれぞれ 13.5% と 8.8% である。それらの実際の受験者率が英検の 3% 以下という現状を考慮すると、同時に新しい英語検定試験に対する受験意欲や関心の高さといったものが窺える。このことは、両試験共に 2 年生より 1 年生に受験希望者が多いことや、1 年生には実際に受験している学生がいることから支持される。特に、本学の学生においては TOEFL に対する受験意欲や関心の高さが窺え、英語検定試験という「英検」といった時代ではなくなることが予想される。こうした実状を踏まえた教育を考えた場合、英語検定試験のための教育を積極的に導入することをカリキュラム改革の 1 つの柱とすることも一案といえよう。その場合に、どの試験を目標とするかは簡単に結論のでない事柄と思われるが、本調査結果や「英検・TOEFL・通訳ガイド」の 3 つが英語資格の三冠王と呼ばれていること（小川，1991）を考慮すると、「英検」と「TOEFL」の 2 つを中心に考えていくべきであろうか。私見では、「英検」がより受験英語的試験で、本来の意味での実用英語という点では「TOEFL」の方がより実用的かつ实际的であり、TOEFL の受験を促すような指導とそのための教育が望ましいと考えられる。もちろん、さまざまな英語検定試験の受験を通して、どのような検定試験であっても高得点ないし高レベルの級を取れるような全般的な英語運用能力を身につけさせることが肝要といえる。

次に、学生の英語能力について考えてみると、本学の学生の多くが英検 3 級に合格している。日本英語検定協会では大学受験の際に、資格・特技として書くことのできるの 2 級以上という指導をしていると聞く。小川（1991）の英語検定試験難易度相関表（Table 2）を参考にすると、英検 3 級は TOEFL の 420 点以下で TOEIC の D レベル（220-469）に相当している。因みに、小川（1991）自身は英検 3 級を TOEFL 350 点相当としている。さらに、英検と TOEIC の得点を比較した場合、英検 1 級で 520-850 点で、2 級で 230-690 点の範囲になったという（山口，1986a）。2 級合格者の方のバラツキが大きく、しかも D レベルの者さえいる。こうした点を考慮すると、良くて

Table 2
英語検定試験難易度相関表

CELT	TOFEL	英 検	ガイド試験	通訳検定	商業英検	国連英検	TOEIC	
295-300	650-679		合格 (10.2%)	1 級 (5%)	A クラス (6.7%)	特A級	Aレベル 860-990 (3%)	
290-294	630-649							
285-289	610-629							
280-284	600-609	1 級 (4.2%)		2 級 (16%)	B クラス (8.4%)	A 級	Bレベル 730-859 (8%)	
275-279	580-599							
270-274	560-579							
260-269	540-559	準1 級 (9.4%)		3 級 (38%)	C クラス (34.7%)	B 級	Cレベル 470-729 (49%)	
240-259	520-539							
220-239	500-519							
200-219	480-499	2 級 (16.5%)		4 級 (58%)	D クラス (16.6%)	C 級	Dレベル 220-469 (37%)	
190-199	460-479							
180-189	440-459							
170-179	420-439	3 級 (47.4%)					D 級	Eレベル 0-219 (3%)
160-169	400-419							
150-159	380-399							
130-149	360-379	4 級 (68.0%)						
110-129	340-359							
90-109	320-339							
70- 89	300-319							
50- 69	280-299							
40- 49	260-279							
30- 39	240-259							
20- 29	220-239							
0- 19								

(注) %＝対志願者の平均合格率。「英検」および「ガイド試験」の合格率は平成元年度のもの。

英検準1級は昭和62年6月より実施。

英検2級多くが3級の学生の英語能力はそれほど高くない可能性があると考えられる。また、英語検定試験に対する知識についてみると、英検では2級を目標級としている学生の大部分の受験希望者が、TOEFL 500－600点およびTOEIC 590－860点という目標得点の設定をしている。これはTable 2の難易度相関表を考慮すると、TOEFLやTOEICの難易度に関する知識の乏しいことが窺える。さらに、TOEFL 500点はアメリカ・カナダなどの四年制大学入学の得点で、TOEICにおける現実の大学卒新入社員の平均得点が375点（TOEFL 426点）であるという実態から判断すると（山口，1986a, b），これは単に難易度を明確に把握していないというより，（受験希望する割に）TOEFLやTOEICに対する基本的知識が不確かで乏しいことを反映しているものと考えられる。

最後に、英語教育の在り方および日本人の英語能力の実態といったものを山口（1986a, b）に示されているTOEFLやTOEICの結果を参考に考えてみたい。「日本人は英語を聞いたり話したりすることは苦手だが、読み書きはある程度できる」と考えられているが、実態は必ずしもそうとは言えないようである。TOEFLについて分野別領域の比較をすると、文法的なテストは聴解力や読解力のテストより成績が確かに良いが、良いといっても英語を母国語としない107のグループ中83番目で、総合成績では107グループ中89番目ということであり、英語を母国語としない国の中では

かなり低いほうといえる。特に、読解力や語彙力が低く出ている。これは外国語学習に「速読」的要素が欠如していたためと考察されている。また、聴解力 (listening ability) はネイティブスピーカーと外国人との間で最も大きな差がみられ、次に語彙力 (vocabulary) の差が大きいとされる。これは TOEIC においても同様で、英語国民は Listening スコア (L) に対して Reading スコア (R) が下回り、反対に日本人は $R > L$ の関係になるという。英語を直接聞く機会の少ない外国人にとって聴解力や語彙力に差がでるのではないかと考えられている。こうした外国語学習の成否を決定する要因は、先ず「教え方」や「学び方」つまり指導方法や学習方法に求められやすい。しかしながら、実際の能力向上にはさまざまな要因が絡むとされる。それ以外「学習者の言語適性」「学習者の知能」「学習時間」「学習者の学習持続性」といったものが考えられている。John B. Carroll の分析によると、この中でも「学習時間」と「学習持続性」の2つが最も重要な役割を果たすとされている。つまり、学生自身が英語を学ぶ目的や意義をはっきりと持ち、根気強く学習を続けるということが英語学習の基本とされる。学習者の目的意識や必要性がなければ高い能力や学力の獲得が難しいことは、他の学習にも共通のことかもしれないが、外国語学習には日常生活の上でそうした目的意識や必要性を持ちにくいところに学習の困難さがあるのかもしれない。その他、より英語運用能力が向上するには言葉だけでなく、文化や風俗習慣の違いや社会一般の基礎的な知識が必要なことが指摘されている。「英会話ができないのではなく、英語とその言葉の文化的な知識が不足しているので、自分の思っているような会話ができないのである」と同様のことを小川 (1991) も述べている。いずれにせよ、英検 3 級程度の能力の学生を例えばアメリカの大学入学基準である TOEFL 500-550 点のレベルまでに 2 年間でもっていくには、教える方にも教わる方にも相当な努力が必要と考えられる。

付 記

本研究に協力して戴いた大塚稔助教授および学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。また、貴重な時間を調査のために使わせて戴いた春日克則先生には改めて御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 赤川裕 (編) 1991 ケンブリッジ英検 2 級 (PET) 合格演習 研究社出版
 大谷立美・大谷加代子 1992 TOEFL 550 点突破 三修社
 小川富二 1991 英語資格の三冠王 三修社
 仲本浩喜 1990 TOEFL ジャンプアップ 500 S.S. コミュニケーションズ
 日本英語教育協会 (編) 1992 実用英語技能検定 1 級全問題集 ('92 年度用) 日本英語教育協会
 日本英語教育協会 (編) 1992 実用英語技能検定 準 1 級全問題集 ('92 年度用) 日本英語教育協会
 日本英語教育協会 (編) 1992 実用英語技能検定 2 級全問題集 ('92 年度用) 日本英語教育協会
 日本英語教育協会 (編) 1992 実用英語技能検定 3 級全問題集 ('92 年度用) 日本英語教育協会
 日本国際連合協会 (編) 1988 1988 年版国連英検問題集特 A 級 講談社
 日本国際連合協会 (編) 1988 1988 年版国連英検問題集 A 級 講談社
 日本国際連合協会 (編) 1988 1988 年版国連英検問題集 B 級 講談社
 日本国際連合協会 (編) 1988 1988 年版国連英検問題集 C 級 講談社

日本国際連合協会（編） 1988 1988年版国連英検問題集D級 講談社

山口耕一（編） 1986a 英語の検定試験'86 別冊 The English Journal 16 アルク

山口耕一（編） 1986b こうすればかならず伸びるTOEIC攻略法 別冊 The English Journal 21 アルク

〔1993年12月10日受理〕

資料1 英語検定試験に関する調査用紙

<p>このたび、英語科では英語検定試験の受験状況と今後の受験希望について調べることにしました。学生の皆さんの意見をお聞きして、今後の英語検定試験の教育・指導に役立てようと考えています。ありのままに答えて下さい。なお、この結果はまとめて集計しますので、個人の名前はいりません。ご協力お願い致します。</p> <p>該当する学年に○印をつけてください。 1年・2年</p>	
質問番号	質問内容
Q 1	<p>今までに英語検定試験を受けたことがありますか。</p> <p>1 はい 2 いいえ</p> <p>「はい」と答えた方はQ 2以下の質問に答えてください。</p> <p>「いいえ」と答えた方は3頁のQ 8以下の質問に答えてください。</p>
Q 2	<p>今までに受けた英語検定試験はどの種類ですか。</p> <p>受けた試験すべて答えてください。(複数回答可)</p> <p>① 実用英語技能検定試験(英検) ② TOEFL</p> <p>③ TOEIC ④ 商業英語検定試験</p> <p>⑤ その他</p>
Q 3-1	<p>①に○印をつけた方は現在持っている級を答えてください。</p> <p>1 1級 2 準1級 3 2級</p> <p>4 3級 5 4級 6 5級 7 なし</p>
Q 3-2	<p>②に○印をつけた方は何点とったか答えてください。</p> <p>1 600-677 2 550-660 3 500-550</p> <p>4 460-500 5 370-460 6 370未満</p>
Q 3-3	<p>③に○印をつけた方は何点とったか答えてください。</p> <p>1 860-990 2 730-860 3 590-730</p> <p>4 470-590 5 220-470 6 220未満</p>
Q 3-4	<p>④に○印をつけた方は現在持っている級を答えてください。</p> <p>1 1級 2 2級 3 3級</p>
Q 3-5	<p>⑤に○印をつけた方はその得点ないし級を答えてください。</p>
Q 4	<p>今後も英語検定を受ける予定ですか。</p> <p>1 はい 2 いいえ</p>
Q 8	<p>Q 1で「いいえ」と答えた方で今後英語検定を受ける予定がありますか。</p> <p>1 はい 2 いいえ</p>
Q 5 (Q 9)	<p>「はい」と答えた方はどの検定試験を受けようと考えていますか。</p> <p>受験希望の試験をすべて答えてください。(複数回答可)</p> <p>① 実用英語技能検定試験(英検) ② TOEFL</p> <p>③ TOEIC ④ 商業英語検定試験</p> <p>⑤ その他</p>
Q 6-1 (Q 10-1)	<p>①に○印をつけた方は希望する級を答えてください。</p> <p>1 1級 2 準1級 3 2級</p> <p>4 3級 5 4級 6 5級 7 なし</p>
Q 6-2 (Q 10-2)	<p>②に○印をつけた方は目標とする得点を答えてください。</p> <p>1 600-677 2 550-600 3 500-550</p> <p>4 460-500 5 370-460 6 370未満</p>
Q 6-3 (Q 10-3)	<p>③に○印をつけた方は目標とする得点を答えてください。</p> <p>1 860-990 2 730-860 3 590-730</p> <p>4 470-590 5 220-470 6 220未満</p>
Q 6-4 (Q 10-4)	<p>④に○印をつけた方は希望する級を答えてください。</p> <p>1 1級 2 2級 3 3級</p>
Q 6-5 (Q 10-5)	<p>⑤に○印をつけた方は目標とする得点ないし級を書いてください。</p>
Q 7 (Q 11)	<p>「いいえ」と答えた方はその理由を挙げてください。(複数回答可)</p> <p>1 無意味だから 2 勉強不足で合格が困難だから 3 時間がないから</p> <p>4 能力的に自信がないから 5 興味がなくなったから 6 特に理由なし</p> <p>7 その他</p>